特集1 解題

バブル期の都市問題とジェントリフィケーション論 ——なぜ「地上げ」は「ジェントリフィケーション」と呼ばれなかったのか——

Urban problems and discourses of gentrification in the age of Bubble Economy:

Why weren't the "Jiage" phenomena described as "gentrification"?

下村恭広

Yasuhiro SHIMOMURA

五十嵐泰正

Yasumasa IGARASHI

赤瀬川原平『超芸術トマソン』（筑摩書房 1987年）には、東京都心で再開発を待つ谷底の無人の町で、銭湯が取り壊され、残された煙突だけがそびえる写真が収められている。煙突の根元は何か構築物で囲まれていて、バリケードのようだ。そこから筆者は、再開発の立ち退きに所有者が抵抗しているのだと想像する。ところが付近の人々に聞いてみると、ここの銭湯経営者は早々に移転を承諾したという。煙突は取り壊しに手間がかかるので放置されているだけだったのだ。それは無慈悲な立ち退きへの抵抗の証しではなく、「トマソン」——建物の一部が当初の用途を失ったまま放置されていること——のひとつとして採集され、その頂上で撮影された写真が本の表紙を飾った。この煙突のあった「ビルに沈む町」は、かつての麻布谷町、現在のアークヒルズである。今日でもまた、そこからほど近い麻布郵便局の裏手の谷間を降りていくと、同じような風景と出会う。小さな通りに空き家が立ち並び、ところどころ駐車場となっている。その一帯にも、まもなく高層ビルが複数棟建てられる予定だ。

「トマソン」のひとつとして見出された煙突は、その後都心のいたるところで繰り返された光景の先駆けであった。そのころすでにインナーシティ問題が広く関心を呼び、多くの調査が手がけられている。やがて地価の高騰が始まり、「地上げ」の横行が報道されるようになる。こうして展開していったバブル期（1980年代後半から1990年代前半）の都市構造変動は、今日の視点で振り返ると、同時代の英語圏で隆盛していたジェントリフィケーション論と共鳴する研究領域になる現象のように見える。しかしジェントリフィケーションの概念は、日本の都市社会学では争点としての求心力を持つことはなかった。このことは日本の都市の現実にとって、またそれと向き合っていた都市研究にとって何を意味するのだろうか。

第34回大会のシンポジウム「バブル期の都市問題とジェントリフィケーション論」

（2016年9月4日）は、こうした問いを主題に開かれた。これに先立つ2015年度大会のテーマ部会では、ジェントリフィケーションの概念が提示している視角について確認し、この概念によって現在の都市の理解がより深まるのか、またこれまでの対象の捉え方がどのように変わりうるのか、議論を深めることを目指した。そこで明確になったことは、ジェントリフィケーションの発現形態が、各都市の社会構造と空間構造の結びつき方によって変わってくる、さらにそもそもそれがどのように認識され、社会問題として成立するかどうかは、社会運動などのつくりだす政治的文脈に依拠していることである。この議論を踏まえると、日本の都市社会学でジェントリフィケーションが争点としては不在に見えた状況は、人々の関心を集めなかったというような消極的な結果とはいえない。むしろ当時の都市問題の把握において、この概念をそのまま用いても意義が定かではない理論的／社会的文脈があつての結果だと考えられる。そこで2016年度のシンポジウムでは、東京の都市構造再編について1980年代までさかのぼって捉えなおし、それをめぐる政治的争点の浮き上がり方や、議論の布置状況を見直すことが企画された。

当日は第1報告として町村敬志会員（一橋大学）より、東京を取り巻くマクロな政治経済的変動についてバブル期から今日までを振り返り、そこから見えてくるものが何かが提示された。第2報告の橋本健二氏（早稲田大学）からは、現在の観点から1980年代からの東京の階級構造の変動が明らかにされ、あわせて都市論と階級論との関係について問題提起があった。浦野正樹会員（早稲田大学）による第3報告では、当時手がけていた「地上げ」に伴う地域社会の変動に関する調査について、その際の問題関心とそこで得られた知見を現在の視点から振り返られた。また討論者として、人口の都心回帰の調査を進めている上野淳子会員（桃山学院大学）と、都市政策の国際比較を手がけてられている齊藤麻人会員（横浜国立大学）にコメントをいただいた。

まずは当日の議論で印象深く感じた点に触れておきたい。町村報告と浦野報告が共通して指摘した当時の感覚として、ジェントリフィケーションの概念を使うことは、都市の現実についての表層的な理解につながりかねないという躊躇を覚えさせた。おそらくそこには、橋本報告が社会階層論の観点から強調したように、そもそも1980年代から始まっていた社会的格差の拡大について議論しにくかった状況が背後にあった。上野会員と齊藤会員からは、この概念の使いにくさが今日も変わらないことが加えられた。都心で繰り返されてきた大規模再開発に対してジェントリフィケーションを安易に適用すると、かえってこの概念が触発してきた様々な議論とのつながりを閉ざす可能性もある。ジェントリフィケーションは時として、生産拠点の移転で放棄された倉庫や工場、あるいは労働者や移民の集住地区に根ざした生活様式などに、ある種の審美的価値が見いだされる過程を伴う。都市再開発はそのような都市空間の認識の転換から経済的利益を引きだすが、実際にこの認識の転換を担う人々が開発利益を直接享受する人々と重なるとは限らない。このようなジェントリフィケーションにおける経済的側面と文化的側面とのつながり方は、都心の大

規模な再開発だけを念頭に置いていると、視野に入りにくい問題だろう。

こうした昨年度の大会シンポジウムでの議論を経て、今号には、報告者だった3氏の論考が寄せられた。

町村会員はまず、1980年代末のバブル期から現在までの東京の変容を、「ひとつ」のトレンドとして、ジェントリフィケーションと一言で呼んでしまうことに注意を促す。東京の超高層ビル数は、バブルが崩壊した「失われた20年」の間にむしろ、10年間ごとに倍々ゲームで増加していることを押さえたうえで、確かにその起点とはなったバブル期の開発の現場に入ると、むしろ移転する側のしたたかさが印象づけられたという。しかし、この時期の開発計画はバブル崩壊で頓挫し、その後は、まさにそのバブル崩壊という「危機」を突破するための規制緩和策として民間資本の導入がはかられる。さらには不動産金融化の技術が急速に進展した2000年代に至って、「都心に住むこと」のイデオロギー化や文化的キッチュの再動員を伴い、細分化された地域・物件ごとの微細な格差意識を伴いながら東京を改造していった。こうした30年間にわたる一連の過程を時期ごとに丁寧に振り返る町村論文は、なぜ地震などの災害の多い東京が、本来必ずしも適していないタワーブロック型の街へと改造されていったのかを問いかける。

次に橋本健二氏は、階層研究の立場から、なぜ1980年代初頭から始まっていた日本社会の格差拡大傾向を、2000年代に至るまで問題化することが出来なかったのはなぜかと説き起こす。そして、バブル期以前から階層研究に都市分極化仮説と接続した視点があれば、言説状況は違ったはずだという見解を示したうえで、しかしそれでも、80年代当時は都市の分極化傾向を掴まえることが難しかった理由を、国勢調査の地域別集計表における階層構造の経年データなどから剔出する。その分析から橋本論文は、東京におけるジェントリフィケーションの過程には「時間差」があったのだと、きわめて興味深い指摘をする——すなわち、1980年代から東京の旧中間階級たる家族経営の自営業者層などの解体と減少が進行するが、その人口的空白は2000年代に入ってからの中間階級の流入まで埋められることがなかったために、バブル期から90年代にかけての東京の空間構造の変化は、住民層の入れ替えを伴う階級対立の焦点ではなく、都心の空洞化として経験・観察されたのであり、言い換えれば、東京のジェントリフィケーションは30年越しの「無血革命」であったのだ、と。

第三論文の浦野会員は、地上げに象徴される1980年代の土地問題は、インナーシティの問題と理解されやすいジェントリフィケーションという言葉よりも、はるかに大きな社会変動として捉えるべきだったと指摘した上で、当時土地問題が顕在化していた地区で行った調査を振り返り、「地上げ」がどのように人々に経験されていったのかミクロな分析を試みる。そして、地理的特性のみならず、住民の年齢構成や職業構成などに起因する対抗力の強さや、地域イメージの共有度合いといった要素が、当該地区の土地問題の趨勢に重要な影響を及ぼすこと、土地取引の急増による社会変動が、地区内の人間関係の剥奪

から地域における規範や勤労意欲の減退に至るまでの事態を引き起こすことなど、コミュニティ論の観点からもきわめて興味深い知見を提示する。しかし同時に、高額な立ち退き料を得て郊外に移動していく、地上げに巻き込まれた当時の人々の姿は、ジェントリフィケーションという言葉とどこかズレがある印象に映ったという。この指摘は、町村論文が指摘したバブル期の地上げで立ち退くことになった人々の「したたかさ」のありかを示し、橋本論文に対して、その解体された旧中間層の行先を示唆するものでもある。

多くの場合深刻な摩擦を引き起こす住民層の入れ替えと、文化的な動員を伴う都市再編を指すものとして定義すべきジェントリフィケーションという言葉、この言葉でフレーム化されていった欧米の都市再編をめぐる問題とはかなり異なった様相で、同時代の日本に顕在化していた「地上げ」「土地問題」に対して用いるのは、確かに適切ではない。ではなぜ「そのとき」に、「地上げ」はジェントリフィケーションと異なった貌を見せていたのか。マクロな都市改造の推移の分析、ミクロな土地問題の経験の分析、そして階層構造の変化の分析という3つのアプローチがパズルのように組み合わさることで、その輪郭が徐々に明らかになっていったこの特集は、バブル期の「地上げ」を伊丹十三の映画や長渕剛のドラマの中の出来事として少年期に「経験」し、その後、ジェントリフィケーションという欧米由来の言葉を学んだ世代の企画者には、非常にスリリングなものであった。橋本健二氏も強調するように、大都市人口比率の高い日本では、都市の階層・階級構造の変動は社会全体のそれを決定的な形で左右するがゆえに、「実のところ階級・階層論と都市社会学は、密接に関連する問題を、時にはほぼ同一の問題を扱って」いる。この特集ではまさに、この両分野の「意識的な交流と連携」の必要性を、痛感することができるだろう。

（しもむら やすひろ／玉川大学リベラルアーツ学部准教授）

（いがらし やすまさ／筑波大学大学院人文社会系准教授）